



鳳中の晴

狸廻之部

六



長門

萩 武門連

己父中阿と萩城子松子門の兵衛として
其の勢を所々の兵を以て其の兵を以て
初子の折りて其の志を以て其の志を以て
中きとて其の志を以て其の志を以て
あんなまより其の志を以て其の志を以て
そのより其の志を以て其の志を以て
ありて其の志を以て其の志を以て
中せし其の志を以て其の志を以て
其の志を以て其の志を以て其の志を以て
心平なり月より其の志を以て其の志を以て

241

三休のそとさひなくのちたのこまてく徑面
ありてちよくはなちちちの湯を定て
けりいぬ月もさちあふは

琴所

林とさし子初もさしそは院もさ

園むん一免のえんぬ月 づふ

若冢のしつちたのお嵐と才もちて 中薨

神の拙きいのかうくさぬく 虎丸

松林たされも百年二百歳 里川

何てんちこもれ 志天

そ日のほろよわうの法邦の徑面
はくちよふみ月のきち健をさね
たさけうけつる

園薨

その色の日まけしるる仙翁む

あさるのちねさを月子終くさ づふ

お初年子あふのる守松きのみさけ 里川

をま紀やう口五経をさ 志天

着板しきりやぬんおとのあ 琴所

さふえんいあめさだれうも 志天

二

み月やて 露泊の 柳宿を 柳子一境乃
自落るを 千載の 塚まをりし 乃るん
そよやと さらば 身よをりて

山陰

凡の如く 傳しそゆ 松の 影涼し

その乃 志きふ 月乃の 夕なる 碧空

森塚の 見氏す 御種公 年々 移すつ
の 風雅す 秋の 夕て 此は 古た 此乃
れに 唯 讀の 友と 此と 此を 此と
此と 此の 此を 此乃 此乃 此乃
の 此と 此の 信と 此の 此の 此の 此の
虚言す 又も 守す 自在なる 人なる

この 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の
此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の
一 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の

山陰

よも 月乃の 影を 見たりて 末きれ

そより 自然の 影を 見たり 山陰

去年の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の
此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の
此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の
此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の

山陰の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の
此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の
此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の
此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の 此の

つとめ川をわたり一まはらむ時

名塚

ふくのさかひはなほゆく 海の音 なぐ 中阿

せいのくくとおちやうのうらうら 古はる 琴阿

火より雲より月より 竊案記 中阿

いのちのなほふ浦の改きりい 杜曉

花の原と結ぶこころいそ 中阿 味凡

りよもやみの晩清いま川 中阿 味凡

健心 中阿 の木橋 中阿 虎丸

初原 中阿 あれ 中阿 のと 中阿 望凡

意 中阿 の 中阿 柳 中阿 の 中阿 菊 中阿 陌了

夏 中阿 の 中阿 萩 中阿 の 中阿 菊 中阿 の 中阿 花 中阿 兼柏

春 中阿 の 中阿 花 中阿 の 中阿 柳 中阿 の 中阿 花 中阿 尾韻

早 中阿 の 中阿 萩 中阿 の 中阿 花 中阿 の 中阿 柳 中阿 の 中阿 花 中阿 不尺

ふ 中阿 の 中阿 萩 中阿 の 中阿 花 中阿 の 中阿 柳 中阿 の 中阿 花 中阿 己全

登りて又もやまをよるて 一徑

降るもよれぬむよしちなる松一本 幹陸

あのかやあつきさる風を限 沈水

江あまよ 人こころをまてまはる 飯石

苔がやまおひくると脚のぬ 丸指

あふあしちるまよふはのさる 志天

あふあしちるまよふはのさる 志天

あふあしちるまよふはのさる 志天

あふあしちるまよふはのさる 志天

あふあしちるまよふはのさる 志天

あふあしちるまよふはのさる 志天

あふあしちるまよふはのさる 志天

あふあしちるまよふはのさる 志天

あふあしちるまよふはのさる 志天

あふあしちるまよふはのさる 志天

あふあしちるまよふはのさる 志天

花とよき雪とやうに静かに
 白く白く雪とやうに静かに
 と壇とよき川にあげて花菊は
 林火の日にしるすよの跡を
 多御さくせし何まよへ山梅
 まよあとの身は残る中静のあ
 雪やなほ入つりよるるの
 古林園 里川

セツ

冬くもしつとくはぬ長門のふしは残る
 早しゆりのこころをわが林の樹下は日ぬ
 力のぬきよよはるの氣をわが心はゆ

雪のふり 早の心をわが心はゆ
 玉おふ

こころの雪を推のこころはゆ
 雪のふり 早の心をわが心はゆ
 玉おふ

このの 雲をいひてはなす
のんきんやしてはの神
探者一まぬの

枕巻の山宮のつと晴のよめ
東坊

同新唐波尾連

まゝの林のわをよりぬのひちりん
むしおまよまはたえんまよまはたえん
の社中一して流くれまよこのまよ
しんた怒東のこまよまよまよ
はくねよりおるる息のまよまよ

おまよまよまよのまよまよ
むしおまよまよまよまよまよ
まよまよまよまよまよまよ

雲の音のほこしすまよまよ仲る
東坊

まよまよまよまよまよまよ
割まよまよまよまよまよ
怒凡

まよまよまよまよまよまよ
身一目のまよまよまよまよ
素調

まよまよまよまよまよまよ
まよまよまよまよまよまよ
東坊

おのゝりよ鳥の書雲の横はな 李隆

嫁の禊のころー洗滌 立故

さゆやうよささくあつたふさふさ 呂輝

彼岸此岸よふまはつた 為亭

ぬくぬく祇堂の志は雲の宗 可得

さあや仲居よ羽織ささき 新巴

谷をさるはと泥はてふふふの 地吉

化もーの信田とささ 葦和

あふふ夕日の脚は何まをり 考之

いづれ山に神の石置とやり 其夕

まこはちと新禊は清な和島と 古桐

新しう山を仕参説文 常守

あやや子二百十日の月は新 如流

あやや角力の像身つり 呂角

あややと新し女房の振はあや 此中

毒のあや子何と喰ふふし 可宥

時ふくく美めうふ草と年あふせ 菊之
和しよほふふの陽片 藤葉

名録

おのりく林のまゝや 一ツ庵 忍風
川流のまゝに流すや 月 栗之
向のぬあけてしとて 花 芳中
夕まや 蓮の糸破るはあゝ 呂好
鬼灯や 似るね 乳母の口よ 露草

谷ふふふと山とそま川や石露のふと 素潤
は紅と花一そまふふりふ草葉の 孫知
まゝのふやりまけ一て花のちあの中 孝傑
こ山まゝと 津の林に一そまふふ 龍巴
振てそお茶のまゝに遊一とんこを 立坂
まゝのやん 津の草 葉のまゝ 可相
まゝ一はとそまふふやらふそまふふ 尾所
石川まゝとまゝの 流一花月 藤葉
法松房建

雀子の花いふ所のさやうに并 可宥

花はくはれぬのさやうにおよ 古桐

起しの目をさぐるとちり様 故右

雲にや影のこて居るお知り 其夕

際一のさなうとや方一牡丹畑 此中

余息や人の余を痛むる角心 如流

五月雨や正坐のしるしは 夏和

むしりや廊のさなはは 長角

雪のくさくさたるさやふぬ 東宇

凡蘭やよ水のあふるさな た之

乳のすくふと女とあり 専之

須佐

吐き草

花鳥

花のすくふと女とあり 専之

あしきと月と流のさや 南之

送つてはよみ仲居の夜よぬれて 浮舟

よみよみあはれぬる夜をてやう 舟車

河遍る舟并盤きくくちくと 枕室

舟をめぐらむる舟走をくは 芝山

鞆ふくく比敵へ之里の人離れ 起六

船入りて地をよみよみとや 古梅

名流

初まるや門よまはれ 新の中 南之

寝食のまゝと 神へあまの山はく 浮舟

襟治れおまゝと 舟をきさひ 舟車

祀きあはれ舟も 植ゑぬ厄の庵 枕室

舟の中に 植ゑぬとて 曇りぬれ 芝山

よみよみあはれぬる夜をてやう 可洗

舟をきあはれ舟も 植ゑぬ厄の庵 樂枝

舟の中に 植ゑぬとて 曇りぬれ 起六

舟をきあはれ舟も 植ゑぬ厄の庵 古梅

三

三

と氣もく夕日の暮やけし一原 九瀧

お又て下年ぬけさうり踊る水 荏秀

布川やその晒人の日子罵し 怡文

熊中路の名をすてけく暮さし 凡子

江邊

何し西角子の地名を家伝をわ
るはつてふともありて溪水のこころ
驚し下凡流と無し

江邊とよまふもくしや凡子の母と
つ本坊

あまふもお水一夢の初了 二庫

出のわりの三氣をせもまんこるふと
祭夜

仲人せふとふもい人もあはし 句法

自中さし小坂をく川の近一里 山氣

ねん お坊のさるくらや 寺

名源

兜帯と持てふあつし一凌平ほど 三角

あぬ月をあひくしきよし一葉家 山氣

九瀧

山

下丁 杉小 隈小 杉小 尾 藤の抄 ねん 洲産
五月 雨や 柳の 裾も 川あふ け と 湖 舟
山と やさふ めうて 人 津 敷 寺 白 法

石見

木部 吹世

木部の石見吹世 山に氏 裾波子と
百喜と 老丈の 海平 かなり けいしん 布ら
徑回七 号 森より 石蓋の 方へ 赴く その

中より 早き されを 依り 流る 文と 号 宗 ありぬ
周縁より とき 一 あり 田 藤 一 丁 徑 壁を
諸の 山 越を とき 一 向 難し 又 され 中より
き 所 一 や ね あり 一 山と 名 あり 名 あり 名 あり
あり たく 藤 一 あり 名 あり 名 あり 名 あり
所より 名 あり 一 あり 一 あり 一 あり 一 あり
真 一 あり 一 あり

山部

あつと 一 と 子 橋や 吹 橋を 舟の 花
折 一 と 杉 川 月 の 初 敷
未 一 ち 一 杉 一 あり 一 あり 一 あり 一 あり
田 一 倉 一 一 と あり 一 の あり 一 あり 一 あり

相 雨 柳 波 敷 法

持ゆゑに教方もほのたりし
浦夕

まゝにあらはれし教
百尋

名取

藤の音や山よきと近あり
相面

紙まのてまよよむとん
百尋

まよよむ中よむの音あり
浦夕

まよよむ遠わらふ子の
指傳

上庄長井

ゆゆとま三里とくり木櫃の祖傳い
一丁長ゆゑ山里をくぬ何の一巻ま子
のゆゑに招れゆゑにみ月もまゐらん
例時々南山の嶺ありあり
むよよむ程よむと叫ぶえん
の田舎とよむゆゑ

長夕の祖傳い

まよよむ
まよよむ

日ちあはる林とまよよむ
急舟

舟おし延びまよよむ
梨殺

まよよむ世話をし
栄園

うきまの作廢生るの流しぬけ
其水

幸代は味ふ各下さる
如泉

破流のさしとまててと山と川
虚吹

鳥の群まれぬけりよ飛ぶ
己来

名流

うきまの作廢生るの流しぬけ
其水

信山より枯をききとて一そよ我
如泉

吹葉をて川まじりぬ落葉ふ
虚吹

新なる信しむるのまじりぬ
己来

涼風や背戸の掃除を又一そよ
梨子

道田

幸代は味ふ各下さる
如泉

文月やそれよあかりしるをきよ
其水

流の深のそよの流
梨子

お言をよみかきん 袷の質も出さず 何人

多し子とよ乃る水指しと 袷

あそと家小石やまの節も下柳 権耳

まこと二アんとる息のつと 三考

産きの肴傍取りとをんこ 素人

やぶふ陰鳥へ嘘もつと小柳 青澤

えまやとる水の小月よの呉服お 袷

くられ片くやうなこの丸木指 壺長

おとろけははらとて花の土初らあ 竹程

お嫁はくく雛も 次一

まらの歯も言ふよのちとほり 芥二

羽織の雛も吉来水と 浦林

子細き水と渭水のゆも川 支松

大根市へよ小荷の出入 津林

起しと乳のそかえり起嬌の 鹿少

よれと世等やう風も川をり 冬吳

月の夜に玉を千淋し山吹をふり 梨衣

あむきを平のむしりあわく 乙未

存行し只あり台の社母をとり 女 桂川

あまやくと片拵りあふ 全 雨舟

折りと月を成るえい志の法 百丈

ねむりやうし流笑のよき 汀亮

各歌

妻の林や田舎に雪あけあり 梨衣

うらや世並に初春のまじり 雲明

女子よ子言しとや春の心 百丈

さあねのし掃拵しと紅まゆふ 赤松

葉のるも白雨のむむせんは 梨衣

余しと柄杓しと水と菊 三石

夕真や新地を人の及れ花 以一

夕立のうらと子言をえんるり 行二

管形小蓮月とくろれあやめんは 壺衣

八年のちささしききしつわぬれ 冬吳

二年の初より中敷子そちてし 少年 浦林

多良よ地里有いのう喚ぶんん 全 支那

床々しんおよぶこころ麻のあ 女 松川

くはとや初きとゆてゆしの花 少年 東馬

ふきや新小きふてしとのと 全 松雨

いつきとこころ安きふはのん我 全 仙梅

山吹やふ澄るれ 全 菊望

梅りあやちしんとゆきふ忘るし 全 た梅

咲くともはふ花のよんつる花のふ 全 庭抄

いとわし 全 可好

名月や只清なり 全 半花

雑子なく 全 汀老

押さぬ 全 梅安

こころ 全 喜禪

宿り 全 素人

七

三

やうらゝん程あけりて啼け終 信勢山田 可子

之日よあけたり又悟る海 才助 百子

何れ知れぬ教へて宵への歌ひも 田原山田 壺外

頼もつるは夢のほろろ 深田 雲白

小舟の死に程よふ際へも 六 六

徒らにふれくぬ新橋のれ 魚 魚

をそりよゝんのむし 六 六

早ゆくお場の目まぐる延や 教 教

出^ニるは 子 子

孝保の存 子 子

え服をこめて 白 白

茶やめ 介 介

吹く時 魚 魚

ササのうれ 年 年

作摩 教 教

さり 六 六

三十三

りいとも遠くを産の安くと
子

おろしき水いともよる日
き

鳴けもはく志の如言の時ふく
介

際の新ふも向上一路
日

そは為正門の向海と志を以て書加を
おとるとゆいむも杖と書むしと
なくとよとせんしよとせぬく
年月と送りなるこのやまひげ
かりあふその嬉しき長き世のほれ
まうをんその標よむるよりよる

伊房山田
可子

同くやあまをいほきぬそのめ
成

い女をいんりき乃夕月
山

祓代くう勢詠しつよありて
魚坊

八節

蓋向よひ稿積中しつれ地名
のくよれ佳きしゆろはく
推のまゆしゆろはく旅のま
よをちやうね

八節やいね山とく
山坊

三十三

月夜ふしやまこころ

名白

乳母口舌うみよのこころ

芦律

原をくえゆるゑの法界

文波

けのふよぬしを田よぬく

仙壺

ハチーヤなはくはし

乙牛

既痛よ多ふ

文際

名をみても悟り

乙丁

名源

伸ひこるやとりの井れま

乃月

まゆをとりて

梨吾

ちのえり情んて

裏梅

原ありぬさ

梨吉

さうなや式部

東江

雲の子れ

乙智

まがや

百扇

そらよ

芦律

り遠くくしてそかき伝哉 麻中

春のまこと人よんせとや春のそ 以自

まふんそんまの勝ふとい月雨 仁臺

舞はらまてあつるよきふの月 五丁

夕まや清い水に里うまてあつる 文波

まこつたの古ふもあつた紙を水 以登

あつたや世をれどあつたはく 丁巳

あつたや晴りしえれまこくと 右扇

あつたのぬるい捨るやあつた 孤草

あつた火や清い水に近きあつた 芦く

あつたあつたあつたあつたあつた 昌也

あつたあつたあつたあつたあつた 昌也

あつたあつたあつたあつたあつた 芦橋

あつたあつたあつたあつたあつた 芦江

あつたあつたあつたあつたあつた 友波

あつたあつたあつたあつたあつた 扇涼

乙巳

争の果れぬくさ水枯ゆの 五斗
 谷月や掃くやうなる海の上 瓶十
 暮入や跡と追く抱上乳母心 一瓶
 うんこる啼くやう人も言の坊 兔白
 糸うねや早の雨りとうけて雲く 陶子
 落や羽さぬくよ世を雨日の心 文蝶
 一ぬわぬく雨のそく舞さく 瓢十

横田

世にさし首の通るよあなをのちぢぢを
 ちぢぢ一糸兎子の竹め。里まをちぢぢ
 け和せつのださうくくくくくくくくくくく
 旅りあうくくくくくくくくくくくくくくくく
 らくくくくくくくくくくくくくくくく

三小坊

糸あうまのす足るあのおん世
 やくまうくく山筒る月 糸兎
 糸あうまのす足るあのおん世 瓢瓶
 廊下清んくくくくくくくくくく 青里
 糸あうまのす足るあのおん世 瓢瓶

口ツの日ありてはるまじく

朝風

名録

吹ぬ日しちる屋よ癖の尾末ふ

暮里

舟の花と秋て暮のまがかり

朝風

夢やまをみて又アヤ夢

朝風

ほろし朝の虚言は涼しあの日

夕兔

まはり初冬の暮ありては秋の夕乃
流るるのさふちをちる橋の里にるね

是より此乃の暮にぬる

田防山代
八舟

各々ねくと折居らぬん暮の心

あんのるそそ月をなま

夕兔

暮知しぬるとは音とぬらちて

破了

細中乃のまじりて

朝風

下流のあはれのはれはるる

朝風

知れぬまじりてはるる

暮里

暮々清 在るる

冠李

お雨のちれ志のし 作の 遠白

各派

ふし又何んそあまのま乃雨 善郎

あふしやう教よそえろ 破了

穀汁や母つゝをぬれまらん 沢列

ころちやまゝ一糸りのるまのし 瓶泪

松よびてしあゝ東風のふるふ 遠白

こやくし力や出さむてゝるれあ 芦中

はてううろあんのまをいんて 雨笠

編語や味を淋しと持てぬぬ 冠李

春を新れ流るゝのるまを亦まへ 八木

つ本作 益田 十の 徑 回を 志す といふ あり
一よのつた時やうあつた 既 陀の 志を け
とちあふしやう ちと ちと ちと ちと ちと ちと
とちとあふしやう ちと ちと ちと ちと ちと ちと
とちとあふしやう ちと ちと ちと ちと ちと ちと
とちとあふしやう ちと ちと ちと ちと ちと ちと
とちとあふしやう ちと ちと ちと ちと ちと ちと
とちとあふしやう ちと ちと ちと ちと ちと ちと
とちとあふしやう ちと ちと ちと ちと ちと ちと

24

25

佳良のそましくーきん

あつ後にはー切先はれまのれ日 魚坊

二十里程ををりしも人まわりの石川の魚坊
一丁ここれし中より家もえんちをさしつた
万菊丸うんうぬひ落葉の共舞とまふ
せんやゆもこの程坊とまわつた方とわく
その信をまことし一因のぼくさくわ
よし何れをわくさゆつた程の洞を
五丁より程とまわつた信より酒屋の
そまはるん

あつてまてし神氣さふー月のみま 魚坊

まの角

あつてまの角のくー一葉のせしれ
身重の社と流すてつくと山と常盤ま
木立千とあを茂り石川の流れはれ石の敷
とわくりてそまね風新のそまはる程のそ
の神氣ーまねる程をまわつた

魚坊

秋風やお流のちあかふしとまわつた

和光り月の本さし紙文 鳥仙

出佐っ孫しそ良の此時よあつた社 鶯南

お織りー小睡のそまーし 蛙文

可の中此 鳴りしよふ下ふあり 素不

飛る川とくふも谷のき川 梅口

高直山連て 退く氣と初ふこい 赤十

そ川と唇へ 唇移ふ千骨 車乙

名録

ちね時山 山坊くくこ山 梅 馬仙

うやんく 何妻子 叫りてまの峰 陸丈

古たんとし 毛注て ぬる 素山子 素石

ゆんれ 目よぬと 向く 梅梅の 鶯南

川 流はし 流く 生似の 赤卯く 車し

初なるや 何の 屯おし 赤の上 赤十

ね 屋 赤ふ ちまを 何妻子 初付由 和丈

もを 何て なる 流さる 赤ふ 梅口

虫の 舌や 淋し 山 林と 啼り あり 鳥 鳥階

洋和語

此地のくくまの山 意は 流さる 梅

春下あもし新なるをしくと美人を
小塚下あもしくいりておる日
神徳も厚い掬はよき月あつた
ゆへにそれ等の言あつて不思議
はるおの月よふ後のついでとれ
あふの田舎乃ちわな園遊
湯の心は流やるといふ川
あつりく骨中よゆきり起る水

夕暮るあつりくあつるまじむのむち 大田 魚坊

いつくしたまふ一まめあつる 平

名録

茶のあつるまじむあつる月照 林水
あつるまじむあつる柳 ま白
あつるあつるあつる人あつる人 あ白
あつるあつるあつる子 湖邑
あつるあつるあつる あ白

お陰——小美あつまる小まうれ 千火

内より——流るやと遊のそる 五律

まねた下——を心——と長 馬 馬 馬

まわのそはらぬあま——とどせは 白星

お陰——やと好小船の船はあれ 海芦

お陰——を体も日もあれくたまを 栞五

お陰——をそとるは月の名おは 御月

お陰——出るも連流らやと川 橋 ト之

ま——おちるもゆしお——や小お陰 玉簫

おのあつりよおひいお坊——あつるのそる 女 きく

お——をこくお陰——を葉とあれ 森道

お——をうらひお陰——をあつる 馬 馬

お——をうらひお陰——をあつる 巴城

お——をうらひお陰——をあつる 登路

お——をうらひお陰——をあつる 以昔

2016

2016

